

## 平成27年度第2回みどり市総合教育会議 会議録

・日 時 : 平成27年10月6日(火) 午前10時00分から午前11時20分  
まで

・場 所 : みどり市役所教育庁舎第1会議室

・出席者 : みどり市長 石原 条  
みどり市教育委員会  
委 員 長 金子 祐次郎  
委員長職務代理者 松崎 靖  
委 員 丹羽 千津子  
委 員 山同 善子  
教 育 長 石井 逸雄

(会議に出席した事務局職員)

教育部長、教育総務課長、同課長補佐

・議 題

(1) みどり市教育大綱(案)について

(2) その他

・意見交換

テーマ:「学ぶ楽しさ」について

(教育部長)      みなさんこんにちは。ただいまから第2回の総合教育会議を開会させていただきます。なお本日は、9時45分までに傍聴の受付がございませんので、傍聴者はなしということで進めさせていただきます。それでは、次第に基づきましてごあいさつをいただきたいと思います。最初に石原市長お願いいたします。

(市長)            おはようございます。第2回ではありますけども、日頃からみなさん方にはお世話になりましてありがとうございます。今時は体育シーズン、スポーツの秋のシーズンでありまして、それぞれの小・中学校、保育園、幼稚園いろいろなところで運動会があり、地区でもございます。分担して参加していただきましてありがとうございます。今年と言いますか、今はあまり暑くないのでほっとはしているのですが、これからのシーズンは、今度は台風とか、自然災害のシーズンも当然来ますので、学校の危機管理ということも実は大事であります。そんなことにも留意しながら行政の方も進めてまいりますのでよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

(教育部長)      どうもありがとうございました。続きまして、金子教育委員長よりごあいさつをお願いいたします。

(委員長)          みなさんこんにちは。今日は第2回目の総合教育会議ということになります。この会議は、みどり市のあるべき教育の姿を市長と教育委員会で協議をしながら、お互い連携する中で、より豊かで奥行のある教育を推進していこうというものだと考えております。前回の会議では、初めてということもありましたので、この会議の運営方針ですとか、現状と

課題、そして今日の話題になるところの大綱について基本的な作成方針を確認したところです。今日はそうした事柄を受けて、大綱の策定に向けた協議を行うということになろうかと思います。学ぶことの楽しさや喜びを未来に繋げられるような内容になれば良いなというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(教育部長) どうもありがとうございました。それでは続きまして式次第の3番の議題になります。議題につきましては、この会議の招集者であります石原市長の座長でお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(市長) それでは、議題に入ります。  
みどり市教育大綱（案）になりますけれども、説明をお願いいたします。

#### 議題（1）みどり市教育大綱（案）について

(教育総務課長) それでは、みどり市教育大綱（案）について説明をさせていただきます。お手元にみどり市教育大綱（案）A4の2枚綴じたもの、それと参考資料としましてA3の1枚のものを配付させていただきました。

最初にA3の資料をご覧ください。上段に平成29年度までを計画期間とする現行のみどり市総合計画の概要、中段に平成27年度単年度の教育行政方針の概要をまとめた内容となっております。今回策定しますみどり市教育大綱は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正施行に伴いまして、今年度から地方公共団体の長に策定が義務づけられたものであります。大綱の内容は、地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本たる方針これを定めるものであります。みどり市教育大

綱（案）につきましては、A3資料の下段になりますが、考え方について整理をさせていただきました。みどり市総合計画並びに教育行政方針との整合性が取れた内容とし、その内容としまして1番左にあります教育の基本理念、それと右側にあります大綱の基本目標、この2段構成として整理をさせていただいております。

それでは、もう1つの方の2枚綴り、みどり市教育大綱（案）の方をお願いいたします。表紙をめくっていただきまして、まず1番「大綱策定の趣旨」でございますが、ここでは本市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の根本指針として、この大綱を定めることを記載しております。

続きまして2番「大綱の位置づけ」ですが、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定に基づいて定める計画であるということ、それと今後はこの大綱に沿ってこれまで以上に市と教育委員会が意志の疎通を図りながら教育行政を進めていく旨を記載しております。

3つ目の「大綱の期間」ですが、期間としましては、みどり市総合計画との整合性を図るために、その計画期間が平成29年度までになっておりますので、同じ時期に見直しを行うため、今回の大綱につきましては、平成29年度までの3カ年ということで作成をさせていただいております。

次のページをお願いいたします。4番「みどり市教育の基本理念」ということですが、ここではみどり市が目指す教育の根本的な考え方として、1つは持続可能なみどり市、それからもう1つ未来への継承、この2つをキーワードとしまして、本文4行目からの記載のとおり、『市の将来像に向けてまちづくりを推進し、持続可能なみどり市を実現するため、あらゆる分野で市の発展を支え、そして未来へとしっかりつなぐ人材を確保できるよう、社会の変化に主体的に対応できる市民の育成を目指して教育行政を推進します。』と定めております。そしてこのことを、

ふるさとを未来へつなぐ人づくりという文章で表しております。

続きまして5番「大綱の基本目標」ですが、ここでは基本理念に掲げました教育を体現するため5つの目標を定めております。この5つの目標につきましては、総合計画の5つの施策及びそれとリンクしております教育行政方針の基本施策との整合性を図った内容となっております。

まず最初に1番「生涯学習の推進」。ここでは、生涯学習機会それから生涯学習施設の充実を図り、更に文化・芸術活動を推進するとしております。

2つ目の目標「幼児教育の充実」です。ここでは、心身ともに健康で、安全に幼稚園生活を送ることができる幼児の育成、それから幼児教育環境の整備、充実を図るとしております。

次のページをお願いいたします。3つ目の目標になります。「学校教育の充実」です。ここでは、確かな学力と豊かな心、たくましく生きるための健康・体力を身につけた「生きる力」の育成を目指すとしております。そのためには、必要となる教職員の指導力と資質の向上並びに教育環境の整備、充実を合わせて図るといった内容となっております。

4つ目「文化財の保護と活用」。ここでは、文化財の保護・継承、それから文化財の活用事業の充実を図り、博物館や展示施設の適正な維持管理に努めるとしております。

5つ目「市民スポーツの充実」。ここでは、多くの市民が生涯を通じてスポーツに親しむことができるよう生涯スポーツ活動の充実、併せて施設の整備、充実を図ると定めております。

最後6番の項目ですが、「大綱の基本目標達成に向けた取組」でございます。ここでは、大綱の5つの基本目標を達成するため、教育委員会におきまして、毎年度当初に市の総合計画の基本事業に基づき実施する重点施策をみどり市教育行政方針としてとりまとめ、年度終了後には取り組みの効果や課題等を点検・評価し、その結果を市民のみなさまに公

表するとともに、次年度以降の取り組みに反映させると定めております。

現行の市の総合計画、そして教育委員会が毎年度定めております教育行政方針との整合性を図り、教育の基本理念それとそれを体現する5つの基本目標この2つで構成する大綱（案）として作成をさせていただきました。以上で説明とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

（市長）           ただいまの説明についての質問やご意見がありましたらお願いいたします。

（教育長）           A3の1枚紙のところで確認いただきたいと思います。前回も少し話をさせていただきましたが、みどり市教育委員会とすると教育振興基本計画を定めなければならないという努力義務があるわけですが、それについて教育振興基本計画と銘打ったものについては、みどり市は策定しないという事で進んできております。その根拠としますと、1番上段にありますように、総合計画の中で5つの施策、それから基本事業、めざす姿をしっかりと定めていて、めざす姿の中においては、ここにはありませんが数値目標等もしっかりとおさえた形で総合計画ができていますので、基本的にはこれを長期計画として位置づけ、それらを具現化するために定めている教育行政方針で単年度の目標を定めるというふうな形で進んできております。つまり今までのスタンスとすると、総合計画と単年度の教育行政方針をセットとした形で教育振興基本計画と位置づけるという考え方を取ってきておりますので、今回、教育大綱を定めますが、新たに教育振興基本計画というのを別途作るものではなくて、総合計画と教育行政方針を教育振興基本計画という形で位置づけてまいりたいという事で、今回の教育大綱をまとめるに当たってこの一覧表とさせていただきました。そんなところがございますので、ご承知おきをいただけたらありがたいと思っております。以上でございます。

(市長)           ありがとうございました。他に何かありますでしょうか。ないようですので質疑の方は以上にします。

(市長)           その他ですが、何か事務局の方にはありますか。

(教育総務課長)   特にございません。

(市長)           委員のみなさん方、何かご意見等ございましたらお願いいたします。

(市長)           特にないので、議題の方は以上で終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

(教育部長)       どうもありがとうございました。それでは3番の議題が終了いたしましたので、4番の意見交換に移らせていただきたいと思います。本日は意見交換として「学ぶ楽しさ」というテーマを設定させていただきました。進め方といたしましては、最初に現在大学院で学ばれている石原市長に生涯学習、それから学ぶ楽しさについて思いやまた新たな発見等がございましたらお話をいただきまして、その後各委員さんより意見等をいただき進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは石原市長よろしくお願いします。

(市長)           座ったままで失礼させていただきます。ざっくばらんな話をさせていただきますので、気軽に聞いていただければと思います。前段の議題の方は役所的な話で、今度はあくまで個人的な話ですので、こんなこともやっているのだというふうに聞いていただいて結構です。4月から大学院に通っています。週2回行っていて、木曜日は5時から夜の9時

40分まで、そして土曜日は朝6時に家を出て、6時の電車（りょうもう号）で行って9時30分くらいの授業から夜の8時くらいまで授業を受け、終わって帰って来るというのが1週間のだいたいの日課であります。仕事にはもちろん差し支えないようにやらせてもらっているのですが、それでも土曜日はイベントがあるので、そこは教育長や副市長等に代わってもらっているので、多少仕事の割り振りはしていますが、公務には差し支えないというふうになっています。学んでいる勉強は公共政策という学問であります。何で公共政策かというのにはちゃんと理由があって、私は政治家なものですから、前職は県会議員でその前は国会議員の秘書等もしており、かれこれ20年以上この仕事はしておるのですが、残念ながら行政マンとしてのスキルと言いますか、経験を積んでいません。ですから、議員ならまだしも、首長になった段階で組織のトップでもあるものですから、行政のなんたるかということの中での勉強が足りないというのを常々思っていて、言い換えればそこが良いところでもあって、実は政治家と行政マンの違いって、そこはそれで良いところもあるのですが、ただ実際今日の大綱なんかもそうですけども、こういったものができ上がるときの仕組みっていうのは当然あるのです。何もない中からぼんと出てくるわけではなく、ちゃんとルールがあって、職員一人一人が意識を持って研究をしたり、勉強をしたり、いろいろなものが積み重なってこういったものができて来るのですけども、我々はこれしか見ないのですね。その過程は全然抜けちゃっているわけです。生意気にこんな見てですね、あれが良い、これが良いと意見をするのですけども、実はその場の思いつきとかですね、その場の感覚でしかないというのも事実であります。これは正直、私はそういうふうに感じて、他の市長さんは分かりませんが、そんな感覚がありました。これじゃちょっと、いくらなんでもまずいだろうと。まずいというか、もう少し現場を知ると言いますか、職員の発想を知るというのは大事だろうと。



これこれこういう仕組みでこういう法律があって、公務員というのはこういう思考回路でこういうものを作っているのだということが理論的に理解をできれば、もう体験的には無理ですから、理論的に理解できれば、製品も大事ですが、過程が少しは理解できると思ったので、理屈としての政策を勉強しようと思って大学院に今行っております。ですから、もちろん大学の教授というのは学者ですから、学者の話を聞くという事も実は大事だと最近やっと分かりました。私は、現場を先にしているものですから、とかく我々の仕事もそうでしょうけども、みなさん方も偉い先生の話を聞く気はあると思うのですけれども、まあまあ、たまにはちゃんちゃらおかしいことを結構言うんですよ。ちゃんちゃらおかしいというのは、知りもしないくせにと。現場も分かってないのに、こんなことをよく言えるなというのは確かにあるのです。でも、あるのだけどそういうちゃんちゃらおかしい話というのは、経験があるから言えるのであって、ちゃんちゃらおかしい話をアカデミックでまじめに聞くというのも結構大事で、理論理屈を勉強するというのはこんなに大事なのだというのは、半年間通って最近やっと理解をして来ました。学者の話というのは、確かに理屈なんです。理屈で確かに机上の話かもしれませんが、そういうものがあって始めてこういった製品ができるわけでありまして、何のルールもないところでそんな話はやできないわけですから、そういうところを学ぶというのは、政治家としては大事なというふうに思ったからです。思ったからやっついて、やっぱりその通りやってみて良かったなというふうにはこの半年ですけども思っております。確かに週2回、東京に通うというのは大変な作業なんですけども、その中で、通学の中でも結構いい発見とかですね、日々の仕事の中で受け売りっぽい話になりますけれども、学校での話が直接現場に戻せるようなことも結構あって、それは個人的には非常に良いことだというふうに思っております。楽しいかどうかというのは、それぞれの思いがあるので何とも

言えませんが、僕は楽しくやらせてもらっています。「学ぶ楽しさ」というテーマですけども、楽しさって何かというとそういう新しい発見もそうなのですけども、みなさん方、もちろん学びたいという気持ちもあると思うのですけども、私は今51歳になりましたが、50年も生きて来ると何となく教授の言う難しい話とか、アカデミックな話、単語もそうですが、10発言するとどんなに難しい専門外の話でも2つ、3つは引っかかるんですよ、耳に。多分二十歳の現役の頃は、難しい話、行政用語を言ってるわと。難しいなっていうので全然つまらなくて、ただ居眠りして終わったというような話になったと思うのですが、やはり50歳とか、60歳になると当然経験値が上がりますから、何かしら難しい言葉でも引っかかるんですね。引っかかるとうやはり眠らないのですよ。引っかかるとう「ああこれ知っている」と、難しい話はしているけれども「この言葉知っている。この言葉聞いたことがある。」というふうになると、非常に興味も一段と湧いてくると。教室も大学院の場合は、こんな感じです。もう10人いないくらいの教室なので、環境はとても良いのですね。学部的时候は、体育館みたいな大きな部屋で一方的に教授先生が話をして出席も取ったか取らないかのような話でやって、みなさん方は違うと思いますが、僕自身はいかにさぼって、いかに単位を簡単に取って、いかに早く卒業しようかということばかり考えていました。しかも親の金でということになりますので、お恥ずかしい限りなのですけれども。今、自分の行っている公共政策というのは、公務員あるいは公務員に準じた仕事を3年以上という縛りがあって、その経験がないと受験者枠がないので、最低でも大体30歳くらい、若い人でもですね。そのくらいになりますので、年齢が僕より先輩も結構いらっしゃいます。博士課程を目指している人もいるので、それぞれ非常に経験値のある方ばかりなので、しかもやる気があって来ているという事、あと自分でお金を払っているという事、それでこのくらいの部屋でやっているという

ことなので、とてもとてもさぼるような環境ではないし、さぼろうと思って来ている人は、まずほぼいないと。ちゃんと目的意識がしっかりしているし、基本的には修士論文を書き上げて、論文を発表して、認定されて卒業するという話になるのですけれども、そういったことを目指してやっていると。自分の論文が生意気言えば世のため人のためになる論文だという思いでみなさん取組んでいますから、行政マンが結構多いのですが、環境は非常に良いと思います。1人だけでこんな自己満足でにこっと笑っていてもしょうがないので、こういった話をさせてもらう代わりに私はちゃんと卒業しようと思っています。論文もちゃんと書き上げてみなさん方に、もちろん誰でも見られますけれども、見てもらおうと思いますけども、このことによって職員ですね、みどり市の少なくとも職員にはこういった機会が与えられるような仕組みを作りたいとも思っています。もちろん今職員の方で行っている方もいなくはないと思いますが、仕組みとしてはありません。例えば、夜仕事が終わってから学校へ行きたいという方もいらっしゃると思います。群馬県では今のところ行けるのは、群大と高崎経済大学くらいですかね。そうすると学部とか学びたいと思うことが結構しぼられてしまうので、自分のやりたいことが必ずしも群馬県で完結できないという、ちょっと環境が良くないのですけども、ただ自分もこうやって週2回とはいえ、東京に毎週通っていることができたので、多少時間のやりくりはありますけども、自分の仕事に差し支えない範囲で希望があるならば、そういった制度、例えば時間の融通にしたりとか、あるいはお金もそうですかね、補助金とはいきませんが、そういったものを制度として作ってみるとか、ということも今考えておりまして、それには自分がやらないとやっぱりほら吹けないですね。ほら吹くには自分がやらなくてはなりませんから、きちんと自分で完結をしてやりたいというふうに思っております。この手の話はちょっと切りがなく、今ネタはいっぱいあるんですよ、半年も行って

いるとですね。面白い話も難しい話もネタは結構あるので尽きなくなってしまうので、後は話の中で面白可笑しな話もしたいなと思っているのですけども、そんなことで楽しく行っています。ちなみに今前期が終わりました。うちはクォーター制なので、前期が4分の1、4分の1の2回、後期が2回で、もう後期が始まったので最後の4分の1、4分の1が始まるのですけども、4分の1、4分の1が2つ終わって7教科を受けて、Aプラスが僕は3、Aが3、残念ながらBが1ということです。今大学の評価ってジーピーエーという評価なので、Aプラスが4、Aが3で、Bが2で、Cが1という、いわゆる中学校、小学校でいう5段階評価、4段階評価なんですね。そうすると自分のジーピーエーが今回3.3とか4くらいなので、5段階評価にすると4.3くらいの評定平均というか、通知書というのでしょうか、4.3くらいの平均評定になりますので、このままいけば上智大学くらい推薦で入れるというような評定平均ですけども、まあ残念ながら法政大学ですけどもね。それはそれとして、自分なりにお恥ずかしいながら毎日不明を恥じながら、自分自身のスキルという大げさですけども知識を増やすという作業と、ただ思いはいつもこれは結局世のため人のためになるのだという思いで自分は思い込んでやらせてもらっているんで、ここは結構大事なところで、自分だけ勉強できて自分だけ知識が増えればいいやなんて思うと、こんな詰まらない事はないので、この覚えた知識がどこに活かせるかというところまできちっと考えないと学ぶ楽しさというのはないのですね。だからこれはもう自分の専門の業歴もそうですし、趣味はいずれにいたしましても、学んだという事は結果として世の中に還元できるし、できるのだという思いでやるのが1番いいかなと、これは子どもたちにも言えることなのですけどもね。今やっている勉強がよく自分のためだよとか、将来のためだよというけども、確かに自分のためであり自分の将来のためでもあるのだけども、でももっと言えば、それが自分の知識や技能と

して蓄積することによって、結果として世のため人のためになるのだというところくらいまでは、やっぱり現場では言って欲しいなという思いはあるので、これは半年間通った、本当にまだ半年くらいだから生意気も言えないのですけども、自分なりに濃い時間を過ごさせていただいているので、そんな思いをちょっと披歴をさせていただきました。余計な話もないのですけども、これくらいにして、後はもし楽しい話があれば聞かせてください。どうもありがとうございました。

(教育部長)      ありがとうございました。そうしましたら意見交換という事ですのでお願いいたします。

(松崎委員)      よろしいですか。今のお話を聞いていて、市長が大学に通っているという経験を活かして仕組みを作りたいという、私もそれが1番大事なとかなと思うのですね。この間の中学生の海外派遣でも、やはり子どもたちが勉強したいとか、何かを学びたいとか言ったときに、何かそういう仕組みが受け皿としてできているかどうかということで、大きく子どもの成長に関わって来ると思うのです。市長が休みを利用したりとか、空いた時間を利用してこういう思いで通っているのだとか、学びを知る喜びとか、「これを知る者はこれを好むものにしかず、これを好むものはこれを楽しむものにしかず」という、やはり楽しむという事がとても大事なことで、知るというのは自分の個人の領域の部分なのでしょうけど、楽しむという事はやはり周りの広がりみたいのがあります。木曜と土曜だけでも、出るというのは市長という職責からすると大変な部分のところと、それを出られるような仕組みを作ったり、自分がいないときにはこういうふうにするとか、後は職員の方が勉強したりとか子どもたちが勉強したいときに、こういうふうな仕組みを作っておいてやろうという、教育委員会で言えばそういう部分というのがとても大事なところ

だと思います。教育委員会に限らず、いろいろなところで仕組み作りを考えていくというのも大事なことだと思うのですが、今のお話を聞いて思いました。

(委員長)      今の市長のお話をお聞きして、知識を活かすという部分で松崎さんの話とも重複をするのでしょうけども、学ぶという事は、いろいろな場面でどこでも学びというのはあるのですが、それを活かしていくということになると、なかなか難しいところが出て来ます。学んだことを活かすというその段階になると、今まで学んで来た事以上の事を求めていると活かすことができない。例えば、学校でもそうなのですが、先生から教わった事を人に説明してやる、というふうな事をしようとする、更にそれ以上のものをいろいろ学習して来る必要って出て来るのだと思うのですよね。そういう意味では、そのインプットをアウトプットするときに、次のインプットはもっと大きいインプットを必要とすることになるということで、学びの好循環というのですか、必要が更に補う必要を生んでくるという、そういうサイクルになっていけるような教育ができると良いかなというふうに思ったりもしているのですね。どの学校でもそうだし、家庭でもそうだし、地域でもそうなのではと思うけど、そういう絶えず必要みたいなのがあって、その必要を満たすべく努力をしていくというふうな循環が提供できるような仕組みだとか環境を作っていくということが大変大切なことなのだなというふうに、日頃感じたりもしております。まとめませんが以上です。

(丹羽委員)      学ぶ楽しさというのとちょっと離れてしまうかもしれないのですが、市長が政治家を目指されたのは、何歳くらいの頃で、どんな影響を受けて政治家としてやりたいなと思われたきっかけとか。

(市長)

細かく言うと長くなりますのではしょって話すと、漠然とは子どもの頃からありました。ただそんなの何たるか分からないわけで、漠然と高校に行って、漠然と大学に入って、大学2年のときだと思いますが、漠然と授業に出ていて、それも単位が欲しいから出ていて、たまたま政治学の授業を取っていて、大きい教室で有名な政治学の先生の授業を聞いていたら、やっぱり政治って面白いなとそのときに思って、ただ思っただけだけど、どうなったらなれるのかなと子どもなりに考えました。理由はいっぱいあるんですよ。今思うと恥ずかしい理由がいっぱいあるのですけどもね、そんな理由で子どもなりの理由で政治を目指してみよう。では、どうしたらなれるのか。別に試験があるわけでもないし、あえて言えば試験と言えば選挙ですから、当時インターネットもありませんので、いろいろな人の話を聞いたりとか、地元の長老の話を聞いたりとかして、結論とすれば国会議員の秘書になるのが1番近道だったと。当時地元だったのが中島源太郎先生という太田の富士重工の議員さんがいらっしゃって、たまたま知り合いがいたものですから、そこをお願いをしたら、ちゃんと本人とお会いしてですね、大学3年くらいのときからアルバイトで国会の方に通っていて、中島のところでアルバイトみたいな、学校に行きながらですけども、どっちが本業か分からないですけども、そんなことをやっていて、2年くらいして卒業を迎えたのですよ。そうは言っても明確な目的があった訳ではないし、政治家って何になりたいのと。ただ2年間やっているうち、国会議員でしたけれどもなんとなく政治家の日常とか、いろいろ陳情が来て地元の市町村議員さんとか長が来たりして話を聞くうちに、何となく自分の中でイメージができて上がって、これは意外に面白いと、人生の選択肢の1つとしてはこれは非常にウエートが高いと4年のときに思ったのです。当時はバブルなのです。だから就職なんかいくらでもあって、僕のときだって、友だちなんてのは4年になったらすぐくらいに内定を3つ4つもらって、当

時は内定時に小遣い、支度金みたいなものをくれたりする企業もあったりとか、夏休みは熱海の温泉に連れて行ってくれたりとか、そんなのばっかりなんですよ、研修と称してですね。でも僕はそこでバイトをしていて、夏ぐらいにできれば僕はこのまま仕事がしたいというふうに代議士に相談をしたら、今でも覚えているのは、中島代議士という人は偉い人で、分かったと。石原の話は分かったと。その代り、企業の内定書ももらって来いと。一応民間を受けた方が良いというのですよ。分かりましたと言って、そのときはその心が分からなかったのですが、当時こんな遅れたけれども、秋ぐらいだけでも、結構内定なんていうのは時代が良かったので2つ3つもらえたのですよ。それで内定書をもって中島のところに行って、先生、これだけ受験したら2つ3つ内定をもらえましたという話をしたら、石原君その意味分からないかと。分かりませんというふうに言ったら、そこで初めて中島が言ってくれたのが、何もやることがないから政治家を選ぶ、あるいは、世の中に適応できないから政治家をやるなんていうのはもっての外だと。世の中から認められたのだけでも政治がやりたいというのであれば俺は受けてやると、そういう意味だと。だから、世の中があなたを受け入れるという意味はどういうことかという、まだあなたは学生なのだから、社会人として企業があなたのことを欲しいということであれば、あなたは社会人として認められていると、いわゆる社会人であると。でも政治がしたいというのであればそれは認めてやるっていう話、そういう意味だったのですね。立派な方ですよ。なるほどと思ってですね。たまたま景気が良いこともあって2つか3つもらって行って、でもそこで改めてA社、B社、C社っていう内定が出ましたけれども、僕は政治をやりたいのですと、ですから先生、僕を雇って下さいと言った瞬間にはじめて分かったと、ならば4月から正式にうちの事務所に来いということで入ったのです。それがあまり言いませんが初めのきっかけです。



(丹羽委員) 良い話を聞きました。

(市長) 立派な方でしたよ。中島先生は。普通はこんな事を言ってくれないですもの。多少縁故があつたり、何かあれば、いいよいいよとみんな政治家は入れちゃうじゃないですか。その後のキャリアは経歴のとおりなのですけどもね。

(丹羽委員) 一度お聞きしたくて、今日は聞くことができて良かったです。

(市長) 明確に、そんなにすごいなんて、あまり青雲の志があつたわけでもないのですけどもね。ただ、その思いは自分のやりたいことで、結果として世のため人のためになるものは政治が一番良いと思ったのですよ。民間も考えたのですけどもね。でも僕の4月からの初任給は12万円くらいですからね。本当に丁稚小僧です。だから、朝中島の自宅に行って、車を洗って待っていて、代議士を乗せて国会に行つて、ずっとついて回つて、昼飯の時間なんかは代議士が食べている時間は一緒に食べられないから待っていて、ちょっとの時間があるとそこで食べて、食べたい時にご飯を食べるというのではなく、食べられるときに食べるのですよ。だから、逃すと食べられなくなっちゃうので、夜も夜の対応があるから、そうすると昼飯が食べられなかったんで、4時に昼飯を食べて、日程見ると無理だから5時に夕飯を食べるとかね。でも食べないと腹減っちゃうのですよ。若いから。それが苦労話ではないですけども、そんなことでしばらく小僧ですよ、それをやらせてもらったのがやっぱり今でも活きますかね。就職する前は多少時間があつたので、4年間ガソリンスタンドでアルバイトをしていたのですよ。学校が飯田橋なので飯田橋のスタンドで4年間。今はこんなに手がきれいですけれども、当時はも

うグランドキャニオンのような手でしたからね。冬なんかこういう風にやると音が聞こえるんだから。ピシピシピシッという割れる音。それで血がじわっと流れてくる。そんな感じですよ。都心のスタンドなので、客も生意気なのばかりいて、洗車機なんか使っちゃ駄目なのですよ。良い車は手洗いだとかですね。そうすると冬寒いのですよ。そんなこともやりながら、遊びながらこの仕事を目指したと、そういうことですね。

(丹羽委員)      なかなか子どもたちが、小学生でも、中学生でも、高校生でもそんなのですけど、今わりとフリーターだったりとか、きちっと職業意識を持たないまま学校を卒業してしまうというのが多いように思われるのですけれども、そういう子どもたちに、自分の将来どんなことをやりたいかなというのを、どんなふうにしたらイメージを持ってもらえるのか。今市長がおっしゃったように、漠然とでも人のためになる仕事がしたいとか、こういう仕事がしたいなとかっていう、そういう意識をどんなふうにしたら子どもたちに持ってもらえるのかなっていう。またちょっと話が飛んでしまうのですが、選挙権が18歳からになるということですが、政治離れだと思うのです。投票率もすごく低いですしね。選挙やってもね。どんなふうに学校教育の中で、子どもたちの意識の中に芽生えさせることができるのかなっていうのがちょっとここのところ考えるのですけれども、これからそのようなこともいろいろ私たちも多少研究したり、勉強したりしなければいけないのかなというふうに、ここのところ思っているのですけれども。

(市長)            中学生でも入るのですか、カリキュラムで。今度の公選法改正については、少しはカリキュラムも変わるのですか。

(教育長)          社会科の授業の中に入り込んでくる予定です。今、学習指導要領を作

っています。

(市長) 中学生の。

(教育長) 中学生の授業に入ってきますね。高校のは、副読本ができたという形で公表されましたけれども、それを受けて義務教育段階でもというところに入ってきます。

(丹羽委員) やっぱちょっと興味を持ってもらわないと、ただ授業でそれをパラパラとやられてしまったのでは、身につかないかなと思って、とても大切な事ですものね。きちっと選挙で投票するっていうことの大切さみたいなものを教えていかなければいけないと思います。

(市長) 投票率が上がるかどうかというのは、まったく予想がつかないですね。数は増えるわけですから、当然分母が増えるので投票率も上がれば良いのですが、分母が増えるという事は多分下がる気がするのですよね。

(丹羽委員) 難しいですね。政治思想的なものを学校では、教師からは偏ったことを教えられないけれども、その辺が難しいところですね。

(教育長) 教師の意識が高くないと、思想的なものを入れてはいけないというところの縛りが強い、べからず集だというふうに言われているくらいの副読本ですので、教員が教える中で、しっかりとした考えを持っている人がそれを使えばしっかりできるのだけれども、教員そのものにも、あまり選挙に、政治に興味がないっていう人を見ると、そういう難しいことはさっと表面だけやればいいやっというふうな形になってくるとすると、これは主権者教育っていうふうなものがしっかりされないことにな

る。そうすると、先ほど出ている投票率だとか、そういうところには繋がらないのだろうなという意味では、やはり教師がしっかりとこの選挙権を持つという事の意味はどういうことであるかということをしかりと捉えていった上で指導していかないと、難しいのだろうなというのを、こちらの立場とするとうんと責任感を感じるころがありますね。

(市長)            たぶん今年の大学入試はその辺の問題が絶対出ますね。論文ではないけど、記述式の問題かな、その辺が1番メジャーになるのではないかな。大学受験の特に面接なんかで聞かれるのではないですかね。

(山同委員)        高校くらいの社会科の授業だと、一通りの事よりも、それを教えた上での社会科の先生の自分の意見みたいなものを、これは僕の考えだけどねっていうところで話してもらうことの方が、とても魅力的だったりするじゃないですか。その辺からちょっと社会に興味を持つとか、政治に興味を持つとかってことがあるので、その辺を取られてしまうというのは、ちょっと残念ですね。

(教育長)            その辺を教える教員というのは、高校の場合には教科担任制なので公民の先生方が中心にやるのでしょう。義務の場合については、特に中学の場合については、そういうところはあまり得意ではないのだけれど、地理的な分野が得意なんだけれども、社会科の免許という形になってくるとそういう教え方になってくると思われます。小学校段階、中学校段階、高校段階というところの中で、しっかりと教育がそこに果たすべき役割について、やがて学習指導要領とか出て来るとどうかということを論議しなければならないところになって来るかもしれないですね。そして、しっかりとした教師が子どもたちにきちんと教え、しっかりとした体験を積ませるということで、自分の時代になったときにしっかりと考えら

れる主権者となっていくというところに持っていくという意味では、教育の責任が重いですかね。あとは家庭の環境ですよ。選挙になっても家の人が行かない、なんて言ったら子どもは行かないですよ。

(山同委員) 自分1人で投票には行かないですね。

(市長) 18、19歳くらいが1番、現実的に住所不定が多そうですね。例えば、住所は群馬にあるけど東京にいたり、あるいは就職しても1番楽しい時間だから、親との多分時間帯が完全にずれる時間だから、それでの住所不定が多くなってしまわないですかね。

(丹羽委員) 親の影響を与えにくい時期ですよ。二十歳前後というのは。

(市長) そう1番この辺がね。

(山同委員) その選挙権の話からは離れてしまうのですが、やはりお話を伺っていて、学んでいる市長さんはとても楽しそうだなと感じました。子どもたちにも学ぶというのは勉強ですよ。勉強してほしいと思うのですが、私たち何のために勉強するのっていうと、やはり自分のためというふうに教えていて、でも今市長からお話があったように、学んでいったことって、将来は人のためにもなるのだなというところに改めて気づかされたかなということを思いました。子どもの頃に何になりたいかというのはやはり、私もそうなのですが、なかったですよ。今うちも高校生になった子どもがいますが、自分では何になりたいかというのが少しずつあったりするみたいなのですが、実はちょっと私はコントロールしたいなんて思ったりしていて、そういう話は聞いてはくれないだろうなというのもあるし、ちょっと揺れてるところもあったりして、

それをどんなふうにもこの人にとって良いようにしたら良いのだろうかなんて、余分な考えをいろいろ詮索したりしているのですけども、ただその子どもの学校でお話を聞いたときに、何になりたいかではなくて、どんなふうになりたいかっていうことを目指しなさいというお話をしてくださった方がいて、例えば医者になりたい、弁護士になりたい、政治家になりたい、教員になりたい、そういうになりたいものという目標を持つということは大事なわけけれども、結局そこに到達してしまったら、もうそれで目標を達成したことになってしまう。そうではなくて、どんな何になりたいかというふうに考えていけば、そこですぐ目標は達成できない。例えば、とても人のためになる何になりたいという事であれば、そのなったことは結果ではなく、最終的な目的ではなくて、そうなった上で目指すものができてくるという話をしてくださったときに、やはり子どもにも響いていたなっていうのはちょっと感じました。ただ響いてもなかなか私たちもそうなのですけど、学ぶというお話を今日何うことにしようという話を聞いた時に、学ぶというとノーベル賞を取られた大村さんもおっしゃっていたのですけど、研究を始めたきっかけというのは、夜学の教員をされていたときに、来ている生徒さんが昼間働いて来て、汚れたままの手でも学びに来たその手を見て、自分はこうしてちゃいけないと奮起して勉強したとおっしゃっていたので、何か自分を奮い立たせるものがないと、勉強ってできないよねっていうふうにちょっと思いながら今日来たのですが、でもそうではなくてもっと簡単に考えて良いのだなということを今ちょっと思いました。そういう奮起させるものがないにしても、やはり自分で学んだことが人のためになるっていうことに気が付いたとき、すごく学びが楽しくなるのかなというふうに思ったので、学んだことが楽しくなるときに学びたくなるっていう、その学びたくなるっていうところが、大人にしても子どもにしても、やはりスイッチ、勉強のスイッチ、学習のスイッチが入るときなのだなとい

うふうに今お話を聞いていて思いました。そのスイッチを入れてあげさえすれば、大人もそうですけど子どもも無限に学べると思うのですよね。小学校、中学校、高校のとっても吸収の良い時期の早くにスイッチが入って、いろんな事に積極的にできると、更に大事な時間を有効に使えるのだなという事を今考えて、そのスイッチを入れるきっかけを作ってあげられるような何か仕組みができると良いかなんて思いました。

(市長)            今の子どもの着眼はユニークだと思います。面白いと思うところが、ああこういうのが面白いんだと、やっぱり我々だと感心するくらい良いところに着眼するしね。造語も含めて言葉を作るのも上手いし。

(山同委員)       私たちが知らないことが多いのですよね。

(市長)            我々のときも、造語があったり隠語があったりしたのだろうけども、今の子どもたちの方が、よっぽどボキャブラリーという意味からすれば、たくさん持っているのではないですかね。だから、そういう着眼があつて、言葉を上手く、「その表現でいいよね」という表現も結構あるんですね。あまりネガティブな表現も良くないけど、ネガティブも含めて良い表現があるから、そういう感性ってすごく大事だと思うし、そういう感性で物事を見ると楽しいことが結構あるのではないですかね。

(山同委員)       そこで、ちょっとこういうふうには評価してあげられる周りがあると良いのですけど、自分を含めて環境が子どもに良いきっかけを作ってあげられる一言とか、そういうものがなかなかなくて、そこがちょっと自分で寂しいなと思います。

(松崎委員)       スイッチが入るとかっていうのは、感動することなのですよね。昔は、

修身の教科書だったり、楠木正成はどうだったとか、神武天皇はどうだったとか、何かそういうので、昔の軍人さんはどうだったとか、それは良い悪いは別として、こういう大人になりたいとか、そこのところでは、人の役に立つとか、この国のためになるとか、何かそういうものというのがあって、その辺のところというのが今何か日本が敗戦したときに、良いものも全部なくしてしまった部分というのもあると思うのですが、やはりそういうもので感動するって、例えば今の人話を聞くとか、今やっぱり市長の話を聞いてああそうだなとかって、こういうのって子どもたちにも聞かせてやりたいなとか、この間、星野富弘さんの新しい企画展に行って来たのだけれども、やはりあの人にして見れば、自然の美しさに感動、子どものときに感動した体験があるとか、良い先生に出会ったとか、そういうのっていうのは、徐々に徐々に何となく漠然とみたいなの、でも何となく漠然とというのが、どこかでスイッチが入るところの、これはあのときのあれだったのだみたいになってあると思うのですよね。そういうものを周囲の環境がたくさん子どもたちに与えてやるかどうかというのは、すごく大きな差になって来るのではないかなと思いますけどもね。

(市長)       自分が興味があるものでやったのだけれども、そこから派生して何かやってみると、実はこっちの方が好きだったということが結構あったりするんで、そういうのって大事ですよ。みなさん方も経験があると思いますけどね。今、授業に行って、公共政策なのですが、違う選考も受けたりしているのですよ。1つは、日本語の性格という題名の授業なのですが、日本語の授業なのです。恥ずかしながら、日本語ってみなさん勉強してないじゃないですか。そういう意味では、何でそうなのというのが分からなくて、自分とあともう定年を過ぎたおじさんがもう1人いて、あと10何人が全部外国人なのです。東南アジア系が多いので



すけど。先生はもちろん日本人なのですけれども、ネイティブが2人しかなくて、例えば、「れんだく」なんて言葉を知らないでしょう。連なると濁ると書いて「れんだく」というのですよ。徒然とか、云々とか、同じ言葉が繋がるときに濁るというものは、日本語の「れんだく」と言うのですよ。漢字で書けば連なって濁るから、何となくイメージはできるのですけども、「れんだく」なんて意識して発言していないし、習っていないわけですよ。「れんだく」になるときっていうのは、それなりにルールがあるのですよ。日本語って。なので連濁しないものもあるわけですよ。どういうときに連濁するのかというルールがあって、そんなこと聞かれても全然分からないわけですよ。でも外国人はきちっと分かっているのですよ。こういう何とかがあって、こういうときにこうなりますっていうのが、理屈なんかで勉強しているわけではないから、まったくもって日本人は分からない。そういう事なんか、今ほんの一部ですけども聞いてみると「へえ」と思ってですね。

(山同委員) 外国語習うときというのは、そういう習い方をしますよね。ちょっと朝ラジオでハングル語とか聞いていると、そういう何か理屈っぽいことをたくさん連ねていますよね。でも、あんな事考えながらたぶん韓国の方は話しているわけではないでしょうけど、仕組みに直してみるとそういうことなのだって。

(市長) オノマトペとかね。これはよく文章のいろはみたいな事やっているとすごく恥ずかしいですよ。日本人なのに、しかもいい歳しているのに、留学生はみなさん東南アジアの若い人、20代くらいの方が多いのですが、彼らが答えられて。本当に恥ずかしながら、日本語の勉強とかはもう一つかなという状況です。

(山同委員) 流暢なのですか。向こうの方は。

(市長) もちろん、基本的に喋れないと利用できませんからね。日本語の授業なので先生も全部日本語だから、それは日本語が理解できないと単位が取れませんからね。中国系が多いですけどもね。だから、中国人の場合は、我々も何となく漢字で分かるじゃないですか。何となく雰囲気分かるので、それはアドバンテージがあるのでしょうか。東南アジアだと日本の大学の大学院というのが1つのライセンスになるのですよ。就職のね。だから国に帰って日本の大学院を出ましたと、法政くらいだったら、そこそこですからね。だから一応日本の6大学の中の、東大ではないけれども法政くらい出ておけば、国に帰ると、就職先も多少は良いところに行けるという、多分彼らはそういう思いがあるのですね。哲学なんて言うのも、多分取っていないけど変わっている感じで面白いですよ。見ているとね。講義とか先生とか、こんな授業がありますなんていうのがあって、哲学なんて言うのは、本当この人は変わっているだろうなという感じですね。こんな授業受けてみたいなと思いますよ。でもちょっと取っていないけど。来年取ろうかなと思っていますけどね。

(山同委員) 桐生大学も一般聴講、市が少し免除してとかって。

(市長) 聴講生は取っていますね。夜はやっていない。日曜か土曜日かな。

(山同委員) 授業料をみどり市の人は、減額するなんていうふうに広報に出していましたね。

(市長) そうかもしれないですね。どうせ行くのだったら、多少行った証拠が欲しいので、心理とすると聴講生よりはやっぱり、きちんと修士を取る

とか、博士を取るとか。何となく張り合いがありますよね。うちなんかも、聴講生とか来ていますけども、聴講生だと試験も何もないし、ただ聞いているだけです、特に認定とかあるわけではないので、試験もレポートが多いのですが、書かなくていいわけですよ。そうすると何か張り合いはあまり良くないですよ。できればちゃんと入った方が良くと思いますけどもね。あとは、学校の戦略だと思うのですが、リターン学生を。我々の年代ですよ。今、子どもの数がどんどん減っていつて、学校も経営難になって来るので、いろんな意味で大変だということで、一度経験のある学部を卒業したOBも含めてそこにアプローチをして、学びっていうのは楽しいですよというところの中から、またリターンをしてもらおうと。そういうニーズって結構今あるみたいで、あまりそれが商業ベースになると良くないのですが、早稲田なんかは完全に商業ベースで、早稲田の名前があるからなのだろうけども、1年で履修できるのですよ。早稲田って。大学院が1年で、早稲田大学の大学院卒になるわけですよ。学歴が1年で。でも値段が250万なのです。早稲田は申しわけないけど金で学位を売っているという感じがします。だから結構議員さんは多いのではないですか。早稲田に行く人。

(山同委員) 箔が付くということですね。

(市長) 明治もやっています。1年履修って。やっぱり同じくらいで。うちは自分が行っているということもあるのですがけども、結構良心的にやっていて、値段も卒業生は入学金免除なのです。一応僕はOBなので、入学を1回しているから曲がりなりにも、だから入学金は免除なのです。結構入学金で馬鹿にならなくて、15万くらい取られるので、大学院生はですね。そうするとでも通学の定期代くらいにはなるので、学割で行っていますから僕は安く行けます。

(山同委員) それはどこに行っても使えるのですか。映画館とか行っても学割は。

(市長) 学生証がありますから、それは向こうが断らなければ、怪訝な顔はされますけどね、使ったことはないけど。今度シネコンでも行って、映画館でちょっと出してみようかなと思いますけど。こんなことがあるので、ぜひみなさん方、まあ別に無理やり勧めることもないですよ。主婦も結構来ていますよ。僕のクラスメイトも結構。

(山同委員) もうちょっとしたら行ってみたいと思いますけどね。

(市長) 学校に行くだけでも刺激になるし、通学の電車の中だって変な奴いっぱいいるので、変なというか面白い人がいっぱいいるので、人間観察しているだけでも東京へ通っている価値もあるかなと。そうやって探していると結構会うのですよ、あるのですよ、ぶつかるのですよ面白いことに。だから極力居眠りをしないで、いろんな人がいるなと思いながら楽しく自分は見ていて、いろんなことに遭遇できたりするのですよね。

(山同委員) 土曜日よりもう号に乗るときは、気を付けないと。

(市長) りょうもう号は、席が見えないですからね。朝1番の6時6分赤城発で出て行くので、太田で6時40何分でりょうもう号に乗り換えて、結構速く着いちゃうのですよね。1時間くらい学校に早く着いちゃうので、学校の中でちょっと飯を食いながらゆつくりしてですね。だって学生時代なんか絶対しなかった予習復習をしているのですもの、何でしてるのかっていうくらい。でもうれしいのだけど。かと言って現役の頃はできたかというといけないのですよ。現役の頃は。現役の頃できている人と

というのは、やっぱり本当にこの位の人。だから、自分ちの子どもができないのはしょうがない。予習復習や自分の将来がきちっと分かっている子は、もうほんのこんな感じですよ。1割いないでしょう。なんていうふうな感じは、自分でやっという気持ちになって分かりますね。

(委員長) 教える側からすれば、まさにそういう生徒が理想の生徒っていうことになるのでしょね。きっと。

(市長) 大学院の教授は楽しいと思いますよ。楽しいと思うし、ただ逆に専門の領域になりますと、結構専門家が来ているので、教授より詳しい人もいますよ。部門によっては変わった方が良いじゃないかというくらい詳しい人もいますよ。行政枠だと税務なんていうのもあるですよ。そうすると税務の先生もちゃんと理屈を言うのだけど、現場で例えば県税事務所の所長をやっているとかですね、税務課だけをずっとやっている人なんかいると、先生も分かっているから、これはどういうのですかと聞くのですけどもね、めちゃくちゃ詳しいですからね。それはそれでまたこっちも面白いですよね。ネットワークも広がりますのでね。うちの学部というか専攻は公務員が多いので、都庁とか区役所とか。議員と議員志望が何人かいるのですけども、首長はいません。今月の24日にシンポジウムが法政大学であるので、そこにパネラーで僕は出させてもらうのですけれども、学校からすれば完全に僕は商業ベースな人間なのです。営業なのです。もちろんギャランティーは出ませんが、卒業生で、現役の市長で、現役の法政大学院生ですというと売りになるじゃないですか。完全に商業ベースに乗っかっちゃったのです。僕はね。24日にシンポジウムに出させてもらって、あと来月くらいには、1コマ自分が授業をやるというのがあって、他の先生から依頼が来て、ぜひ石原さんに授業を1コマやってくださいというね。現役の学

部生、21歳くらいの子に授業をやるのですけどもね。

(松崎委員)      そういう授業って良いよね。みどり市の小、中学校でね。

(市長)            前1回ちょっとやらせてもらったのですけどもね。日本語の授業の中の一環なのですけども、政治家のコミュニケーション方法そんな感じの授業なのですけども、そうとう難しいような題名だったと思いますけど。

(丹羽委員)        市長の出前授業みたいな、各学校を回ってもらって。

(教育長)          やってはもらっているのですが、今お話を聞いていて、中学生なんかにはちょっと良いじゃないみたいな、この後校長会に行きますので、何で学ぶのだろうなんてあたりのところから楽しい話が聞けるかもしれないので、また少しね。

(松崎委員)        何で勉強するのというところがね。さわりというか、きっかけというか、そういうのをやったら、今さっきのスイッチオンになると。

(山同委員)        今ちょうどそういうことにすごく悩んでいる年頃でしょう、中学生くらいって、進路があったり。その通りにならなくても良いのですけど、ちょっとそのときに何か1つ持っていると違いますよね。

(丹羽委員)        ちょっとした刺激になれば。

(教育長)          いろいろ市長さんからお話を伺ったりして、実はシステムづくりという事の中で、教員というのは、辞令交付のときにみなさん見ていただけると、総合教育センターに行ってるまるまる給料もらって1年間受ける研

修と週に一遍の研修があつて、これが県の教育委員会がやっている研修で、実はみどり市は、これが良いだろうと私がずっと力を入れてきました。今の市長さんの話を伺って、実は群大とそれから上越教育大学から毎年1人か2人出してくれと言う形で来るのですが、あまり勧めていませんでした。それはまるまる2年間、給料をもらって行きますから、1年目は給料をもらいながらまるまる大学へ行って、大学院生として学び、2年目は、授業日は全部学校の授業をしながら、夜とか土日にスクーリングをするという形のものです、大学院卒業になるのですね。公募が来るのは、この辺ですと群大と上越教育大学、更に鳴門教育大学、宮城教育大学からも来るのですが、なかなかそこまで行けるってということではなくいる状況です。ただ今の市長さんのお話を聞くと、私も少し考え方を変えて、総合教育センターという、より実践的なところが教育委員会にとっては良いだろうというふうには思いますけども、深い学びだとか、あるいは人との繋がりだとかっていうのを考えると、教員っていう経験を持ちながら大学院生活を送った上で戻ってきてもらって、子どもの前に立つという事を考えると、大学院に行ってもらうのも良いかななんていうふうに改めて思いましたね。教員とするとそういうシステムが今あるのですね。そういうことを考えると上越教育大学、群大この辺りにもっともっと踏み込んでいった方が、先々みどり市の教育もレベルが上がるかなと改めて感じましたね。

(市長)       総合大学の方が良いですよ。専科で行ってしまうとそれしかやらないから。もちろん教育がメインで良いのですが、他の専攻を受けるって結構大事ですね。行く人が明らかに違うのですよ。公共施策って公務員ばかりじゃないですか。もう1個日本語を取ったのですが、経済も取ってみたのですよ。経済の授業に来ている人って明らかに違うのですよ。公務員の人と。その発想ってすごく神聖になるし、人脈も

できるのですよ。明らかに違うっていうのがよく分かりました。1 番象徴的だったのは、ゼミの席で発表するじゃないですか。持ち時間をみなさん持っていて、10 人もいれば持ち時間があるのですよ。15 分で終わりにしろって言うのに、大体公共施策の生徒って守らないのですよ。時間を。公務員っていうのは、守らない。15 分という時間が守れないのですよ。民間はきちんとやりますもの。まあ5 分くらいはいいだろうと思うのは、大体公務員ですね。民間はきちっとやって、要点をきちんと説明をして、ピタッと時間通りに。やっぱり訓練されているのですよ。公務員は訓練されているとは言わないけれども、多分許されちゃうのですよ。なんていうのがあったので、それだけでも非常に勉強になりますかね。

(教育長)      みなさんも知っている中学生の海外研修で今回引率してくれた先生の 1 人が昨日表彰されました。ロゴを作ってですね。彼が昨日素晴らしかったのは、機転がすごかったことで、こういう人材だったのだと改めて認識したのですが、その前に受賞された方が、応募状況も含めて、少し市は考えた方がいいんじゃないかっていうコメントを言った後に彼が出てきて、「僕は学校にいる立場として、子どもたちにもっと投げ掛けるだとか、そういうことが必要だったのだという事を改めて学びました」なんていうことをちゃんと言った後に、自分のコメントを入れたところ、彼は凄いなと思いました。もう 1 つ彼を紹介しますと、市長さんに行ってハンバーガーを食べて来たりしたのですけども、彼はそういうシステムがある中で、無給休職を取るのです。群大の中の美術の先生から一緒に来て勉強しないかと誘われたと。それなので、教員というのはサラリーがなくなると苦しいから、さっき言ったのは全部給料もらいながら行ける大学院ですね。ところが彼は、給料もらって行けるのはほとんど大体教育学部ばかりですから、美術を専門にやりたいと



いうので、駄目なのです。その代り彼は2年間休職して美術を学ぶという。そういうところ辺りが彼はなかなか変わっているなと思いつつも、本当の学びを求めるだとか、昨日のセレモニーでのあいさつみたいに機転がきいたりとか、この間も自分の持論をきちんとああいう場面で報告の中で述べられるだとか、これからこういう人間で学校現場で大事ななんて改めて思いました。そういうシステムが教員にもあるし、休職という立場をとれば、教員については、もう少し広がった形での大学院で学ぶための休職が取れるので、そういうシステムっていうのも少し考えながら、教員がしっかりと学んで来て、そして学びとは何ぞやとか、今テーマになっている学びの楽しさを子どもたちにきちっと伝えられていけば、もっともっと違うのだらうなと改めて今日感じました。

(松崎委員)      みどり市の教育環境っていうことで言うと、子どもたちが学ぶ教育環境の部分と教える側の環境というか、今の先生方が自分で勉強したいというときに、どういうふうな環境が整っているかというのは、例えば1年でも2年でも勉強に費やしたものが残りの20年なり、30年なりを子どもたちの何百人、何千人に影響を与えられるとしたら、すごい効果を発揮できるわけだから、そういう意味ではみどり市の教育環境というのは、そういう面でも考えていったら良いかもしれないですね。

(教育長)          考え方を変えないと。職員に少し声を掛けていけば、広く学んで戻ってこいという形っていうのはうれしいですね。

(丹羽委員)      群馬県中の先生がみどり市へ行きたいというような、あそこに行く勉強できるよっていう。

(教育長)          県としてシステムを持っていますから、そのシステムをみどり市が乗っ

て使って行けば良いのですからね。ちょっと考えてみたいと思います。

(市長)           ちょっとした切っ掛けを作れるようなところなのですよ。そんなに大それた事ではなくて、ほんの切っ掛けなのですよ。切っ掛けというけど、それがそんな簡単に切っ掛けづくりを提供できるというのは難しいので、気付くか気付かないかというところもあるのですけどもね。

(委員長)           受ける側の感受性というか、そこで随分変わって来ますよね。幅広く提供はしているけれども、ちっとも感じないということもあるし、そこら辺が難しいところですよ。みどり市の中で、例えば今大学へという話だったのですけれども、一般の企業へ研修へ出掛けるみたいな仕組みは確かありましたよね。

(教育長)           みどり市にはないのですが、群馬県の総合教育センターの中の先ほどお話ししました長期研修員の中に長期社会体験研修というのがあるのですよ。それで群銀に行ったり、上毛新聞に行ったりしています。

(委員長)           ありましたよね。銀行へ行ったなんて話も聞いたことがありますし。

(教育長)           あれも良いです。

(委員長)           そうですね。また学校とは、教育の行政の中から出て、他を見るというのも勉強になるものがきっとあるのだろうなという感じがしますね。

(山同委員)          そういう経験値でいうと、県の職員の採用面接に私は携わらせていただいたのですが、今までは40歳まででしたか。

(教育長) 39歳が最後です。

(山同委員) チャンスがないわけですよね。今回は59歳までですのでいろんな方が多分増えたのですが、子育てをしっかりとされたというお母さんで、3人子どもを育てられたという方で、育て終わった後に臨時職員から始めて、教員採用面接を受けに来たという人がいらっしまったのですが、やっぱりそういう方も面接をしてみると、だんトツその方は全然違うのですよ。自分の子どもをしっかりと育て、その目線で子どもを見ているので、どんな子どもが来てもどんと来いだよというような印象で、もう50歳くらいの方だったのですが、この方がきちんと採用されて学校でしてくれたら多分子どもだけではなく、保護者の対応も随分違うのだろうなと思ったので、やっぱりそういう経験で大事ですよね。教員である職場からちょっと離れたところでいろんな経験をして、たっぷりそういう経験を持って戻るというのも良いものだと思いました。

(丹羽委員) 世間知らずの先生に子どもを任せたくないですね。その世界しか知らないっていう人というのは、教員に限らず、市長もいろいろ勉強されて世間を広げてというか、そういう感覚って大切なと思いますよね。

(山同委員) 採用されてしまえば、その日から24歳であろうが、50歳であろうが、担任として向かい合わなければいけないわけですからすごいなと思いました。

(教育部長) 意見交換も名残惜しい気もするのですが、こういった意見交換を今後の総合教育会議の中でも心ゆくまで次の機会を設けるということで、本日は有意義な意見交換という事で、大変ありがとうございました。この後意見交換の方を終了させていただきまして、次第の大きい方の5番「そ

の他」になりますが、次回の総合教育会議、それから次第の3番議題の方で大綱を今日みなさんに慎重審議していただきましたが、事務手続きがどのような形で最終的に決定するか、その辺の2点について事務局の方から少し説明をさせていただきます。

(教育総務課長) それでは教育の大綱の方ですが、ご承認いただいたという事で、この後訂正ありませんので、内部的に事務手続を進めさせていただきまして、決裁日をもって策定という事でさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

(教育総務課長) それと次回の開催ですが、大綱の方を決定いただきましたので、当初12月くらいに大綱の事だったものですから、特に急ぎのものが無い中では、事務局の方で調整をさせていただきまして、委員さん或いは市長から意見を聞きながら、必要に応じて次回調整させていただくという事でよろしいでしょうか。そうすれば、そんな形で第3回以降は準備をさせていただくということでもよろしく願いいたします。以上です。

(教育部長) それでは大変お世話になりました。以上をもちまして第2回の総合教育会議を閉じさせていただきます。大変ご苦勞様でした。